

十二月六日 天気 快晴

本当に大切なものは目に見えない、と昔読んだおはなしには書いてあった。ぼくはそれに全面的に同意する。美樹さやかは、ぼくにとって本当に大切な幼なじみで、今はもう目に見えない、消えてしまった女の子だ。

ぼくは彼女のことをとても大切に思っていたし、彼女もきつとそうだったろう。それはうぬぼれではないと思う。

そうでなければ彼女は毎日のように病院へお見舞いに来てなどくれなかつたろうし、看護婦さんたちにそれをネタにしてくすくす笑われることもなかつたろう。主観的に見ても客観的に見ても、ぼくたちは相思相愛だった。どちらかに、あるいは両方にほんの少しでも勇気があれば、ぼくたちはつきあい始め、幸せなカップルになることが出来ただろう。何の奇跡も無しに。

ほんの少しの勇氣。言うのは簡単だ。けれどそれを手に入れるのはとても難しい。いつだって現実にはぼくたちに足

りないものをお願い知らせる。

『もしも』というのは残酷な言葉だ。たくさんの幸せな可能性の中でぼくたちはたった一つの幸福を選択する。ぼくはたくさんの面倒くさいことから目を背けて、生ぬるい生活を続けた。未来の幸福よりも、現状のちよつとした温さを選んだ。何もしないことで、そういう選択をしたのだ。

どれほどの奇跡があれば、ぼくたちはもう一度会えるのだろうか。どれほどの祈りがあれば、ぼくたちはもう一度やり直せるだろう。大切なものは目に見えないから、ただ星を見上げるしかないのだろうか。徒労に過ぎなくても、彼女がいるかもしれない星を探して。

……センチメンタルが過ぎる。端的に事実を述べよう。

彼女は消えてしまった。ぼくを置いて。

それだけが不変の、唯一の事実だ。

*

十月十五日 天気 くもり

今日の話は、思い出しても自己嫌悪してしまう。

「わたしと一緒にいても、楽しくないですか？」

目の前の女の子にそう訊かれて、そう言えは今はデート中だったのだと思ひ出すような有様だった。取り繕うように、ぼくは一口だけコーヒーを飲んだ。

「ううん、そんなことはないよ。どうして？」

「だって、上条くん、じゃなくて、恭介はずっと遠くを見ているんですもの。わたしがさっきまで何を話していたのか、覚えてますの？」

小さく頬をふくらませる少女はひどく可愛らしい。ぼくは声を出さずに笑って、それから街の雑踏に視線を移した。硝子窓の向こう側にはたくさんの人。腕を組むカップル。ふざけ合う男の子たち。着飾って歩く女の人。

ぼくは無意識に探してしまう。特に、ショートカットの女の子の後ろ姿が見えたときにはどきりとして、思わず立ち上がって追いかけていきそうになる。見直してそれが彼女ではないとわかってさえも。

ぼくは良く分かっているつもりだ。さやかはもう居ない。代わりにクラシックに造詣の深いぼくの新しい女友達がいる。今日だってプラチナチケットを苦労して手に入れてくれて、一緒に聞きに行くところなのだ。

彼女は甘えるように言った。

「ねえ、本当に聞いてますの？」

「ああ。大丈夫だよ」

ぼくは、誰かを置いていったりしない。ぼくが置いて行かれたのだから。

「大丈夫。うん。本当に」

本当に、ぼくは大丈夫なんだろうか？

——そんなわけ、ないじゃないか。

*

五月二十六日 天気 快晴

学ランの襟に汗染みが出来てしまいそうなくらいに暑かった。日の照りつける階段を松葉杖で登って、息がすっかり上がってしまった。リハビリはずいぶんしたつもりだけれど、まだ身体が鈍ってしまったのだろう。

放課後すぐ、ぼくはさやかの家に向かった。あっちの方は毎日病院に来てくれたのに、ぼくから行かないなんてひどいよな、と思っただけなのだ。男友達は例の一件があつて以来、ちよつと寄るところがあつて、とか言うのと、何も聞かずにやにやして解放してくれる。何を誤解してんだか。インターフォンを鳴らして、反応を待った。ずいぶんと時間がかかった。その間ぼくは、ハンカチで汗を拭いていた。

それが、不在を告げられるなんて、思ってもみなかった。まさか昨日からずっと家に帰っていないなんて。

風邪だろう、なんて勝手に思いこんでいた。僕が復学する前の日も学校を休んでいたって聞いたから、つい。

松葉杖なのにシュークリームの可愛らしいパッケージをぶらさげてる自分にあきれてしまう。二つも買って馬鹿みたいだ。さやかが好きだったから。あれならどんなに食欲がなくなっても食べられるから。一緒に食べようなんて、そんなことを思ってた。

「そう、ですか。判りました。また来ます」

そう言って、インターフォンを切った。

何度か深呼吸をして、脈打ち続ける心臓をなだめた。汗がまだだらだらと垂れていた。嫌な予感が、言葉にはならず吐息になって出て行った。

ぼくのせいなんだろうか。

ぼくが、他の子と仲良くしているから。

小さくかぶりを振る。そんなことがあるはずはない。全く関係無いに決まっている。そんな風に変にいじけるのは男らしくないし、何より自意識過剰でイタイ。

ただ、少しだけ疲れただけだ。そのせいで関係の無いことを結びつけて悪い方向に考えてしまうんだ。

これから来たのと同じだけの時間をかけて階段を下りるのがひどくおっくうで、しばらく目の前で陽炎が揺れているのをぼうつと見ていた。

ふと、視線を上げた。階段を上ってきた女の子の名前を

ぼくは呼んだ。

「志築さん……」

驚いた表情を浮かべた彼女は、どこか心細げに見えた。

「わたしもお見舞いに来ましたの。顔を合わせづらいのは確かなのですけれど、出来ればさやかさんとはずっと仲の良いお友達でいたくて」

虫の良い話だとは判っているのだと、彼女はひとりごちた。ぼくは何を言えいいのか判らなかつた。

ただ、ぼくと彼女とが、お互い同じような得体の知れない罪悪感をおぼえているだろうということは想像がついた。そしてその共犯めいた感情を抱えたままでこれから先も生きていくのだろうかという漠然とした予感も。

ぼくは彼女に、ただ事実だけを語った。

「……さやか、いないって」

「え？」

「昨日から、帰ってないって……あつ、でも、判つてると思うけどあんまりよその人に言わないで。大事になると、戻ってきたときにあいつも困るだろうから」

ぼくはこんな時にそれぐらいしか言えない自分に腹が立って仕方がなかつた。どうすればいいのか判らなかつた。

彼女はかぶりをふると、無理矢理に笑顔を浮かべた。

「心配することはありませんわ。きつと、すぐに帰ってくるに違いありませんもの」

「……うん、そうだね」

この暑い中、保ちの悪いお菓子を、取っておける訳がなかった。公園のベンチで並んで二人で食べた。胸焼けがするぐらい甘いはずなのに、ひどく苦いような気がした。

*

五月二十五日 天気 曇りのち雨

ぼくは、少しだけ怒っている。どうしてさやかは話し掛けてくれないんだろう。退院してからほとんど話していなかった。

正直に言えば、照れもある。中学二年の男子としては、女の子と話すのなんか恥ずかしくてやっつけられない。病院みたいに学校から離れた場所ならともかく、クラスメイトにずっと囲まれている中で話掛けるなんて出来ない。そうでなくても恐怖の事故から奇跡の生還を遂げた、とかでまるきり珍獣扱いなんだから、これ以上いじられたくはない。そうは言っても三日も口をきいていないなんて、生まれて初めてだった。ぼくたちはずっと昔からの幼なじみだからこんな喧嘩をすることなんてほとんど無かった。

退院してしまったらもうぼくのことなんてどうでもいい

んだらうか。

そういうことを考えてしまう自分のいじけ根性が嫌になつてしまふ。被害妄想だと判つてはいるのだけれど、どうしても治らない。

さやかに視線を向けると、すぐにそらされる。それだけでなく放課後は教室から足早に去られてしまふ。足の悪いぼくが追いかけられるわけがない。

仕方がないから授業が終わった後は教室で男友達と駄弁つているしかなかった。中学生には中学生なりの付き合いもあるのだ。きつと大人から見たらくだらないことなのだろうけれど、ぼくはこうやって当たり前の日常生活と取り返さなければいけなかった。長かった入院生活で失いかけていた感性を埋めたかった。くだらない世間話でちゃんと笑えるようになりたかった。

と、突然、声が出た。

「上条恭介くん、ですのね」

振り返る。確か、さやかの友達の……なんだっけ。名前を忘れてしまった。

「よろしければ、一緒に帰りませんか？」

「え？」

さやか以外の女の子にそんな風に話掛けられるのは、初

めてのことだった。ぼくが慣れない事態におろおろしているうちに、男友達はそろそろと離れていき、取り残されてしまった。後から知ったのだけれど、彼女は学校で一番のモテ系お嬢様なのだそうだ。

「確か、大橋のほうですわよね？」

彼女はそう言つてにこりと笑んだ。優しそうだけれど、なんだか隙のない笑顔だなと思つた。

学校を出てからもひどく落ち着かなくて、手の汗で松葉杖が滑らないように歩くことだけに集中した。

彼女は一言も話さなかつた。ぼくもまた、何を話せばいいのか判らなかつた。さやか以外の女の子と話すことなんて、ずっと無かつたのだ。

日のわずかに陰つていく間、ぼくたちは黙つて歩いた。ようやく話すべきことが思いついても口の中がからからで、口火を切るのに難儀した。

「……でもさ、志築さんつて帰る方角はこつちなんだっけ？」

今まで帰り道で見かけたことなんて無いような」

「ええ。本当は全然逆方向ですわ」

「え。じゃあ、今日はどうして？」

「上条くんにお話したいことがありますの」

夕日がまぶしくて、彼女ののを見るのが出来なかつた。

た。どちらにしても、こんな状況では恥ずかしくてまともに顔なんか見られない。なんだか、夢か、さもなければどこかのメロドラマみたいだ。

彼女は、ひどく緊張した声で言った。

「これから一緒にいさせて頂ければと思つておりますの」

「え？」

「上条くんのこと、前々からお近づきになりたいと思つておりましたの。出来れば一緒に帰ったり、休日には時々一緒に遊んだりさせて頂きたくつて」

「……友達からで、良ければ」

予防線を引くように、ぼくがそう答えると、彼女はほとんど泣きそうな顔をしてうなずいた。さっきまでの笑顔よりも、その方がずっと自然で素敵だった。

二人で橋の横、瀟洒なレリーフのあるベンチに腰掛けた。ぼくはお互いの共通言語であるさやかのことと、それからクラシック音楽のことばかり話していた。彼女は笑つてうなずいて聞いていてくれた。二人で笑つた。

二人きりで、笑つた。

*

五月二十二日 天気 晴れのち曇り

さやかに内緒で退院したのは、驚かせてやろうと思つた

からだだった。あいつの家にさりげなく立ち寄ったふりなんかして、花束とか持って、ちよつと格好つけたりして。あの時屋上で、君の為に一曲、なんてやってしまつてからこっち、怖いものなんてないはずだった。

ぼくはひどく浮かれていた。この世に奇跡が起きて、有頂天になって何もかもが自分の思い通りになるなんて考えていた。馬鹿で、子供だったんだ。

病院を出たのはおやつの間ぐら이었다。車で送ると言つてくれた両親を振り切つて、せつかく治つたのだから自分の足で一人で歩きたいんだと言ひ張つて飛び出した。皆、一度言い出したら聞かないぼくの性格を知っているから、誰も追いかけては来なかった。

まともに歩けたらたつたの三十分ぐらいでつくはずの道が、二時間かかつてもまだ着かないなんて思つてもみなかった。駅の乗り換えだつて、エレベーターの位置だつてちゃんと調べてきたはずだつたのに、人混みに飲まれて思うようにならない。

途中の花屋で薔薇を少し買ったのが重荷になった。結構高かつたけれど、これぐらい平気だ、と思つていたのに問題はそれとは別のところにあつた。

あせれば焦るほど松葉杖から手が滑る。自分の体重を支

えきれなくてリハビリで作つたママが今更痛む。こんなに長く歩くことなんて、今までなかった。花を入れた紙バッグが振り子のように揺れて体力を消耗させる。思わぬ段差につまづきそうになる。

不意に顔を上げた。曲がるところを間違えたのだろう。見知らぬ街の光景が広がつていた。広がる工場。そびえ立つ鉄塔。大きくて冷たいその風景にしばらく見とれた。ひどく哀しい夕暮れだった。

鉄橋にもたれかかつて休もうと思つたその瞬間、紙バッグのひもが切れて、中身がばさりと転がった。拾おうとして松葉杖ごと倒れる。人はいない。車が音を立てて通りすぎていくだけ。空も雲に隠れてしまつている。闇が建物の影に潜んで、少しずつ世界を覆い隠そうとしている。夕日は遠く、風は肌寒い。まき散らされた紅い薔薇。

どつと疲れが出て、その場へたりこんでしまった。膝を抱えてうずくまる。情けないことだ。男らしくないことだ。判つている。そんなことは判つているのだけれど。ただ目の前の遠い夕日が滲んで仕方がなかった。

確かにぼくの手は冷つた。でも、それだけでは何かを取り戻したことはない。

練習をしなくちゃ。

ちゃんと元通りにする努力をしなくちゃ。一人で自由に歩いて、ちゃんと学校に行って、何もかも元通りにしなくちゃ、ぼくは治ったと言えない。ゾンビではなくても、一人前の人間に戻れたとは言えない。ハイフェッツやパールマンのような、とまでは言わないけれど、プロのバイオリニストになるには、まだまだやらなければいけないことが多すぎる。

「……馬鹿やっけないで、帰ろう」

独り言をつぶやいて、小さく両手で自分の頬を叩いた。寒くて鼻水が出ていた。何もかも全部寒いせいだ、と思うことにした。

一日練習を休めばそれを取り返すのに三日以上はかかる。事故に遭ってから今までのブランクを取り戻すのに、どれだけ時間を費やしても足りないくらいだ。その間に世界中のライバルはどこまで進んでいるのか判らない。ちゃんと自分のことに集中しなければいけない。

一人で立てなければ、誰かと共に立つことは出来ない。何かの本でそう読んだ。

自分のことをちゃんと出来ない奴に、誰かを好きになる資格なんか無いんだ。

*

五月二十日 天気 晴れ

屋上の日差しが優しく降り注いでいた。強い風の吹きすさぶ屋上がいつもよりずっと穏やかに見えた。

父が、母が、先生が、療法士さんが、技師さんが、それから、さやかが、みんながオレンジ色の夕日の中で僕を待っていてくれた。屋上緑化で植えてあるパンジーの花が風に揺らめいてまるで手を振っているようだった。

「本当のお祝いは退院してからなんだけど、足より先に手が治っちゃったしね」

さやかが言う。ぼくは目の前にある、命よりも大切なものを見つめるので精一杯だった。

フルサイズのバイオリン。スプルースの木目が飴色に輝いている。国際ジュニアコンクールで優勝した時に副賞として譲り受けたものだ。ぼくの遠い日の栄光が、ぼくを置いていかずに待っていてくれた。

「お前からは処分してくれと言われていたが、どうしても捨てられなかった。私は」

ぼくには父の声などほとんど聞こえていない。腕が僅かに震えている。夢ではないだろうか。本当に触れるのだろうか。指先を伸ばす。木の堅い感触。手にしっくりとなじむ重さ。弓を構える。一連の動作は夢に見たとおりに淀み

なく起こる。

曲目を考える。心を落ち着かせるための何か、柔らかなものがいい。偶然弓と擦れて落ちた音を起点に、旋律をつむぐ。ぼくを支えてくれた全てのものへの感謝を込めて、グノーのアヴェマリアを。

指先に弦の硬い感触。神経が通じていることの喜び。ゆつたりと肘を動かすごとに音が肩を通じて全身に響いていく。自分にとって足りなかったものが、満ちていく。空気の震えの一つ一つが祝福に満ちていく。心の奥からわき上がってくる優しさやぬくもりを音に乗せて広げていく。花を配るひとのように、指先と弓と弦とで、自分の内側からこみ上げてくる幸福感を広げていく。

曲を終えた瞬間、ぼくは幸せだった。

もうゾンビのように生きて行かなくていいんだ。

*

五月十九日 天気 くもり

先生に、もう、演奏は諦めろと言われた。

さつきからずっと、いつ死のうかつて考えている。

さやかにひどいことを言ってしまった。ぼくは馬鹿だ。

目が覚めたら全部夢で、手が治っていたらいいのに。

起きてるのがつらい。今日はもう、書くのを止めよう。

*

五月十七日 天気 くもり

さやかの前で泣いてしまった。もう恥ずかしくて顔も見せられない。出来ればこのまま死んでしまいたい。

言い訳をするなら、ロシアの荒れ果てた大地のことを考えていたせいだと思う。一本の木も生えていない荒涼とした土地を風が吹きすさぶ。ラフマニノフのヴォカリーゼはそういう気配がする。日本人はやたらとくどくウェットに奏でたがるけれど、ぼくはこの曲は出来るだけ乾いた音で弾きたい。ロシアにはまだ行ったことがないけれど、いつか自由になったらモスクワ音楽院を訪れて……

……やめよう。こんなことを書いたって、空しいだけだ。

自分を騙しているだけだ。そんな日は来ない。希望は断たれたんだ。ぼくがどこかへ旅行することなんて二度と無い。

どうせこんな日記に意味なんかない。紙くずになって捨てるだけだ。それなら今、ここで思っていることを全部書きだしたっていい。そうやって、今のうちに吐き出してしまうんだ。一人だめそめそと泣いてしまえばいい。誰も見てやしない。

こんな身体でどうやって生きていけばいい。ただ、生かされているだけで、迷惑ばかりかけて、何の役にも立たな

くて。こんなに情けない男じゃ、彼女に告白なんて出来っこない。さやかの時間を奪っているだけだ。ぼくは役立たずだ。

音楽を、生きる手段を奪われたのだから、いつそのこと手足を全部もいでくれていれればいいのに。どうして見かけ上だけでもつなぎ止めておくのだろう。何も感じられないのに。ただぼくには理解出来ない高度な技術だけで生きながらえているだけなのに。それだってもう、取り返しのがないことは元に戻せないのだ。

奇跡も魔法もあるわけがない。ぼくはこの世界に置いて行かれたのだ。一人きりで、みんなとは違う世界に取り残されたのだ。砂漠の中に不時着した飛行機乗りみたいにな

*

三月十五日 天気 晴れ

今日で今年の授業が全部終わった。明日は終業式だけだから終わるのが早い。来年もまたさやかと同じクラスになるんだらうか。別にいいんだけど、最近、なんだかやたらまぶしく感じる時があつて、すごく困る。本人には絶対言わないけど。

明日は帰りにCDショップに行こうかな。あその交差点、待つのがつたるといんだよなあ。車もスピード出してる

し。でも、さやかの好きなシュークリーム屋さんが近くにあるから、ついあつちまで行つてしまふ。ぼくはあんまり好きじゃないんだけど、さやかはなんだかんだ理由つけて行きたがる。太るよつて言う顔真つ赤にして怒るくせに。

女の子つてのは、まったく。

*

四月二日 天気 晴れ

今日から中学生だつてのに、またあいつと同じクラスになった。そろそろまわりに冷やかされて、うまく話せなくなりそうだ。でも、制服を着たさやかはちよつとめざらしくて、ああ、あいつもそういえば女の子だったつけない、なんて気持ちにちよつとなつた。絶対言わないけど。

小学校の卒業式で丸めた卒業証書でポカポカ殴り合つてたのがつい二週間ちよつと前のことで、なんか、服だけでヒトつてずいぶん変わるもんだなあ、とかまぬけな考えがうかんだ。本人に言つたら怒られるからだまつておこうつと。

*

十二月二十四日 てんき ゆき

さやかを家によんで、クリスマスパーティーをした。チキンとケーキを食べたあとで、プレゼントこうかんをした。

きよねんもおとしもCDだったのに、ことはマフラーだった。さやかはクラスは家庭科でやったんだって。そういうもののかな？

*

三月十四日 てんき くもり

まえにチョコレートもらったので、さやかに、シュークリームをあげた。いっしょにたべた。あと、ママがえらんでくれた本もあげた。いっしょによんだけど、よくわかんなかった。

どうして、ほしのおうじさまは、ずっとばらといっしょにいなかったのかな？

だいじなら、いっしょにいたらいいのに。

*

2がつ5にち てんき はれ

きょうは、こうえんで、さやかちゃんと、おままごとと、ちゃんばらをして、あそんだ。たのしかった。

それから、レッスンについて、はじめてきよくをとまらずに、ひいた。みんなが、ほめてくれた。

ほくはこれから、ごはんをのこさずたべて、はやくおおきくなって、ふろのバイオリンひきになって、さやかをおよめさんにしたいです、とゆったら、みんながわらった。

たくさんたくさん、わらった。たのしかった。

(了)